

じんむてんのう いみな ひこほゝでみ
神武天皇、諱は彦火火出見。

をさなな さなぬ
小名は狭野。

あまつみおやおほひるめのみこと たかまがはら をさ
天祖大日靈尊、高天原を治めき。

これ あまてらすおほみかみ
是を天照大神となす。

あまてらすおほみかみ こ
天照大神の子

まさか あかつかちはやび あめのおしほみのみこと
正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、

たかみ むすびのみこと むすめ
高皇産靈尊の女

たくはたちゝひめ めと
栲幡千千姫を娶りて、

あまつひこひこほのにゝゝのみにて う
天津彦彦火瓊瓊杵尊を生む。

あまつみおや すで ぐんしん めい
天祖、既に群神に命じ、

かど へいてい
下土を平定せしむ。

すなわち すめみま
迺ち天孫をして、

くだ あしはらのなかつくに を
降りて葦原中國に居らしめて

これ きみ
之が主となし、

たま やさかにのまがたまおよ
賜ふに八坂瓊曲玉及び

や たのかゞみ
八咫鏡。

くさなな みのみこと さんしゆ
草薙劍の三種

の寶物を以てし、

因て之に謂て曰く、

豊葦原瑞穂國は、

是吾が子孫の王たるべき

地なり。

爾宜しく就きて治むべし。

寶祚の隆なること當に

天壤とともに

窮りなかるべしと。

是に於いて、瓊瓊杵尊、

天磐座を離れ、

日向の高千穂峯に降り、

遂に吾田に到り、

大山祇の女

木華開耶姫を娶りて、

彦火火出見尊を生む。

彦火火出見尊は、

わたつみのがみとよたまひこ むすめとよたまひめ

海神豊玉彦の女豊玉姫を

めと ひこなぎさたけう がや

娶りて、彦波瀲武鸕鳥草

ふきあへずのみこと う

葺不合尊を生む。

にゝ ぎのみこと しも

瓊瓊杵尊より下、

ふきあへずのみこと いた

葺不合尊に至るまでは、

よよあいつ

世世相襲ぎ、

あまつ ひだか な

天津日高の號あり、

こうせいこれ たふと

後世之を尊びて、

またみなあまつみおち しよつ

亦皆天祖と稱す。

あまつみおち すえ むきゆう つたは

天祖の胤、無窮に傳る。

ゆえ とうぎよく

故に騰極は、

これ ひつぎ い

之を日嗣と謂ふ。

じやうせい こと ねんだいいうえん

上世の事は、年代悠遠、

しんい はか

神異にして測られざれば、

すべ これ しよつ

總て之を稱して

かみよ

神代と曰ふと云ふ。

てんわう ふきあへずのみこと
天皇は、葺不合尊の

だいよんし
第四子なり。

はゝ たまよりひめ
母を玉依姫と曰ひ、

かのえうま とし もつ うま
庚午の歳を以て生る。

うま めいたつ
生れて明達、

いかくじよ
意確如たり。

とし
年十五にして

た たいし
立ちて太子となり、

ちよう およ
長ずるに及び、

あひらつひめ
吾平津姫を納れて妃となす。

きのえとら とし
甲寅の歳、

てんわう とし
天皇、年四十五歳、

たかちほのみや いま
高千穂宮に在す。

こ とし あた せいしうひさ
是の時に當り、西州久しく

わうくわ かうむ
王化を被りかしども、

とうこくいま ふくじゆう
東國未だ服従せず。

ながすねひこ
長髓彦、

にぎはやびのみこと ほう
饒速日命を奉じて主となし、

えうかし おとうかし やそ たける
兄猾・弟猾・八十梟師・

えしき おとしき ち
兄磯城・弟磯城等、

おのくんぢょう
各君長となり、相統一せず。

てんわう
天皇、

しよくわうけいおよ わうじ いつ いは あ
諸皇兄及び皇子に謂て曰く。

まつみおやかうせきいらい
天祖降迹以来、

おほ ねんしよ へ
多く年所を歴たり。

しか じうんさうまい
而れども、時運草昧にして、

こ せいへん ぢ
此の西邊に治し、

れうばく ぢ
遼邈の地、

なほいまだ わうたく うるほ
猶未だ王澤に霑はず、

つひ むら きみ
遂に邑に君あり、

あれ をさ
村に長あり、

おのおのみづか さかひ わか
各自ら疆を分ちて、

もつ あひりようれき
用て相陵轢せり。

これ しほつち おぢ き
諸を鹽土の老翁に聞く、
ひがし びち
東に美地あり、
せいざん ししう
青山四周し、
またあめのいはふね の
又天磐船に乗りて
くだ
降れるものありと。
おも
意ふに、
それにぎはやび
其饒速日ならんか。
か くに
彼の土は、
けだ りくがふ なかば
蓋し六合の中なれば、
もつ たいげふ くわいこう
以て大業を恢弘し、
てんか くわうたく
天下に光宅するに足らん。
よる っ
宜しく就きて
これ みやこ
之に都すべしと。
しよわうじ
諸皇子、
みなこれ さんせい
皆之を賛成す。

十月五日辛酉、

かのとり

てんわう みづか くわうけいいつせのみこと
天皇、親ら皇兄五瀬命・

いなひのみこと みけいりぬのみこと

稲飯命・三毛入野命、

およ わうじ たぎしみゝのみことたち ひき

及び皇子手研耳命等を帥めて、

しゅうしとうせい

船帥東征し、

はやすひのみなと いた

速吸門に抵る。

ぎよじんうつひこ

漁人珍彦といふものあり、

きた むか

来り迎う。

これ きやうどう

之に郷導を命じ、

な しひね つひこ たま

名を椎根津彦と賜ひ、

すゝ つくしのくにう さ いた

進みて筑紫國菟粹に至る。

うさ つひこ うさ つひめ

菟粹津彦・菟粹津姫、

みや つく きやう たてまつ

宮を造り饗を奉る。

うさ つひめ もつ じしん

菟粹津姫を以て侍臣

あまのたねこのみこと たま つま

天種子命に賜ひ妻となさしむ。

きのえうま

十一月九日甲午、

をかのみなと いた

崗水門に至る。

十二月二十七日壬午、
みづのえうま

安藝に至りて、
あき いた

埃宮に居る。
えのみや を

乙卯の歳、三月六日己未、
きのとう とし じげのひついで

吉備國に入りて、
きびのくに い

行宮を造り、
あんぐう つく

高島の宮と曰ふ。
たかしまのみや い

之に居ること三年、
これ を

舟楫を備へ、
しゅうしふ そな

兵食を蓄へ、
へいしょく たくは

將に一擧して
まさ いっぎよ

天下を平げんとす。
てんか たひら

戊午の歳、
つちのえうま とし

二月十一日丁未、
ひのとひついで

舟師遂に東し、
しゅうしつひ ひがし

舳艫相接して
ちくろ あひせつ

浪速國に抵る。
なみはやのくに いた

三月十日丙子、ひのとね

流を遡りてながれ さかのほ

河内の草香邑青雲白肩津かわち くさかのむらあをくものしろかたのつ

に至る。いた

四月九日甲辰、きのえたつ

兵を勒して龍田に赴く。へい ろく たつた おもむ

路嶮隘にしてみちけんあい

並び行くことを得ず。なら ゆ え

及ち還りて、東のかた、すなは かへ ひがし

膽駒山を歴ていこまやま へ

中州に入らんと欲す。なかつくに い ほつ

長髓彦、衆を悉してながすねひこ しう つく

之を孔舎衛坂に激ふ。これ くさゑのさか むか

與に戦ひて利あらず。とも たゝか り

五瀬命、流矢に中りて、いつせのみこと りうし あた

師進むこと能わず。しすゝ あた

天皇、之を憂ふ。てんわう これ うれ

すなは はか 乃ち謀りて曰く、
いは

われ これひのかみ 我は是日神の子孫なり。
みこ

しか ひむか 而るに日に向ひて虜を征す、
あだせい

これてん さか 是天に逆ふなり。

若かず、
し

しりぞ かへ 退き還りて弱きを示し、
よわしめ

しんぎ れいさい 神祇を禮祭し、
そびらひのかみ

そびら ひのかみ 背に日神の威を負ひ、
あふせふ

かげ したが 影に随ひて厭躡せんには、
あふせふ

すなは やいば 則ち刃に血ぬらずして
ち

あだかなら みづか 虜必ず自ら敗れんと。
やぶ

こゝ おい 是に於いて、

ぐん ひ 軍を引きて還る。
かへ

あだまたあへ せま 虜亦敢えて逼らず。
あだまたあへ

しりぞ くさかのつ 退きて草香津に至り、
いた

たて た 盾を植て、雄誥をなす。
をたけび

因よつて更さらに其その津つを名なけて
たてつ
盾津たてつと曰いへり。

五月みづのととり八日癸酉

茅渟ちぬのやま山城水門きのみなとに至いたる。

五瀬命いつせのみこと、創きずを病やむこと甚はなはだしく、

慨然がいぜんとして劔けんを撫ぶして曰いはく、

大丈夫だいぢやうふ、虜あだに傷きずつけらる、

報むくいずして

死しなんやと。

進すすみて紀伊きいの竈山かまやまに

至いたりて薨こうず。

六月ひのとみ二十三日丁巳、

名草邑なくさのみらに入り、

名草戸畔なくさとへを誅ちうし、

遂つひに狹野さぬを歴へて、

熊野くまぬの神邑かみのむらに抵いたり、

海うみを絶わたりて進すすみ、

暴風ばうふうに遇あひて漂蕩へうとうす。

いなひのみこと　みけいりぬのみこと
稲飯命・三毛入野命、

ふんゑん　うみい
憤惋して海に入る。

てんわう
天皇、

ひと　わうじ　たぎしみのみこと
獨り皇子手研耳命とともに、

すす　あらさかのつ　いた
進みて荒坂津に至り、

にしきと　べ　ちう
丹敷戸畔を誅す。

とき　かみ
時に神あり、

き　は　ひと　どく
氣を吐きて人を毒し、

ぐんしうみな　や
軍衆皆病み、

またた　あた
復振つこと能わず。

てんわう　またい
天皇も亦寐ぬ。

くまぬ　ひとたかくらじ
熊野の人高倉下、

ふつのみたまのつゑ　けん　およ
師靈劍を献ずるに及び、

こつぜん　さ　いは
忽然として寤めて曰く、

われなん　なが　ねむ
予何ぞ長く眠れること

かく　こと
此の若きと。

しそつつい　お
士卒尋で起きぬ。

既すでにして進すすみて
中州なかつくに入いらんと欲ほつす。
山路さんろ險絶けんぜつにして
嚮むかふ所ところを知らず。
天皇夢てんわうゆめむらく、
天照大神あまてらすおほみかみ誨をしへて曰いはく、
今いま、頭八咫鳥やたがらすをして
往ゆかしむ、
宜よろしく以もつて郷導きやうだうとなすべしと。
會頭八咫鳥たまゝやたがらす至いたる。
天皇てんわう、大おほいに喜よろこび、
道臣命みちのおおみのみことをして
大來目おほくめを帥ひきゐ、
頭八咫鳥やたがらすに従したがひて
啓行けいかうせしめ、
遂つひに菟田うたの下縣しもつあがたに
達たつすることを得えたり。

八月二日乙未、
きつふじ

菟田の魁帥兄猾。
うた たける えうかし

弟猾を召す。
おとうかし め

兄猾至らず。
えうかしいた

乃ち道臣命を
すなは みちのおみのみこと

して之を誅せしむ。
これ ちう

弟猾、大に牛酒を設け、
おとうかし おほいぎうしゆ まう

王師を犒ふ。
わうし ねぎら わか

天皇、酒肉を軍に班ち、
てんわう しゆにく ぐん わか

乃ち歌を爲る。
すなは うた つく

是を來目歌と謂ふ。
これ くめのうた い

天皇、親ら輕兵を率ゐて
てんわう みづか けいへい ひき

吉野を巡る。
えしぬ めぐ

土人井光等來り屬す。
どじんゐ ひからきた ぞく

九月五日戊辰、
つちのえたつ

天皇、菟田の高倉山に登り、
てんわう うた たかくらやま のぼ

域中を瞻望するに、
ゐきちう せんぼう

八十梟師、

國見岳の上に軍し、

女軍を女坂に、

男軍を男坂に置きて、

炭を墨坂に熾んにし、

又兄磯城が兵は、

磐余邑に布満し、

皆已に要害を據守して、

道路絶塞せり。

天皇、之を惡み、是の夜、

自ら祈りて寢ぬ。

夢に神の誨あり。

時に會弟猾上言す。

其の言、夢と協へり。

天皇、大に喜び、

椎根津彦・弟猾に命じて、

天香山の土を取り、

すなは ちやそひらか
即ち八十平瓮・

あめのたくじりのいつへ
天手扶嚴瓮を造り、

しんぎ にぶのかはかみ
神祇を丹生川上に祭り、

しゆく いは
祝して曰く、

われまさ やそひらかもち
吾當に八十平瓮を用い、

みず あめ つく
水なくして飴を造るべし。

あめな
飴成らば、

すなは ほうじんか
則ち鋒刃を假らずして、

あ せんか たひら
坐ながら天下を平げんと。

あめはた な
飴果して成りぬ。

またしゆく いは
又祝して曰く、

われまさ いっぺ にぶのかはかみ
吾當に嚴瓮を丹生川上に

しづく
沈むべし、

も ぐんぎよ ち
若し群魚酔ひて浮ばゞ、

すなは われよ くに さだ
則ち吾能く國を定めんと。

へ しづく およ
瓮を沈むるに及び、

うをみなうか い
魚皆浮び出でぬ。

てんわう おほい よろこ
天皇、大に喜び、
すなは に ぶのかはかみ
乃ち丹生川上の
まさかき ぬ
眞坂樹を抜きて、
もつ しょしん まつ
以て諸神を祭る。
かみ まつ
神を祭るに嚴盆を用ふることに、
こゝ はじま
此に始る。
またみづか たかみ むすびのみこと けんさい
又親ら高皇産靈尊を顯齋し、
みちのおみのみこと
道臣命をして
さいしゆ
齋主たらしめ、
いづひめ な さづ
嚴姫の號を授く。
みづのとみ ついたち
十月癸巳の朔、
てんわう いつべ かに な
天皇、嚴盆の糧を嘗め、
へい ろく
兵を勒して出で、
つひ や そ たける
遂に八十梟師を
くにみのをか やぶ これ き
國見岳に破りて之を斬り、
すなは みちのおみのみこと
迺ち道臣命をして、
そ よ たう いひな
其の餘黨を誘ひ
これ つく
之を殲さしむ。

てんわういは
天皇曰く、

たゝかひか
戦勝ちて驕ることなきは、

りやうしやう
良將の行なり。

いまぞくくわいすで
今賊魁既に滅びたれども、

どうあくなほしげ
同惡猶繁し。

なん ひさ
何ぞ久しく一處に頓りて、

もつ へん せい
以て變を制すること

なかる べ
なかる可けん。

すなは うつ べつしよ えい
乃ち徙りて別處に營す。

つちのとみ
十一月七日己巳、

たいきよ まさ しき
大擧して將に磯城を

せ
攻めんとし、

つかひ つか
使を遣はして、

そ くわい め
其の魁を召す。

え しき
兄磯城、

めい こぼ
命を拒み、

おとし ききた くだ
弟磯城來り降る。

因よつて弟おと磯城しきをして

兄え磯城しき及び兄およ倉下えくらじ・

弟おと倉下くらじを曉諭げうゆせしむれども、

皆みな聽きかず。

乃すなはち椎根津彦しひねつひこが計はかりごとを用もちひ、

奇兵きへいを設まうけて、

墨坂すみざかより其その後ろうしろに出いで、

夾擊けふげきして之これを破やぶり、

遂つひに兄え磯城しきを斬きる。

天皇てんわう、五瀬命いつせのみこと、

長髓彦ながすねひこの為ために

命いのちを隕おとし、を以もつて、

意こころに之これを殄滅てんめつせんと欲ほつす。

十二月ひのえさる四日丙申、

進すゝみて長髓彦ながすねひこを討うち、

連戰れんせんして克かたず。

適天たまたまてんくも陰こぼりりて氷こほりを雨ふらす。

鷄とびあり、

天皇の弓ゆはずに集とまり、

金色きんしよくえふいく暉煜として、

狀かたちりうでん流電の如ごとし。

賊軍ぞくぐんめいげん迷眩して、

復戰またたくかふこと能あたはず。

因よつて兵を縦はなちて

急きふに之これを攻せむ。

饒速日命にぎはや びのみこと、

長髓彦ながすねひこを殺ころし、

衆しうを率ひきゐて歸順きじゆんす。

己未じみの歳とし、

二月二十日かのとゐ辛亥、

諸將しよじやうに命めいじて士卒しそつを練ねり、

偏師へんしを分遣ぶんけんして、

層富縣そふのあがたの土蜘蛛つちくも

新城戸畔にひきとべ・居勢祝こせのはぶり・

るのはぶり ちう
猪祝等を誅せしむ。

またたか おをはりのむら つちくも
又高尾張邑に土蜘蛛あり、

みみじか てあしなが
身短くして手足長し。

かつらのあみ むす これ えんさつ
葛網を結びて之を掩殺す。

よつ そ むら あらた なづ
因つて其の邑を更め名けて

かつらぎ い
葛城と曰ふ。

こゝ いた ちうしうへいてい
是に至りて、中州平定す。

とき しふぞくほくろう
時に習俗朴陋にして、

さうせいけつしよ
巢棲穴處す。

てんわう きうしつ けいえい
天皇、宮室を經營して、

もつ みんしん しづ ほつ
以て民心を鎮めんと欲す。

ひのとつ
三月七日丁卯、

れい くだ
令を下して、

みやこ うねび やま とうなん
都を畝傍山の東南、

かしはら ち さだ
檀原の地に奠め、

こ つき いうし めい
是の月、有司に命じて、

これ けいし
之を經始す。

かのをえさる とし
庚申の歳、

九月二十四日乙巳。きのとみ

ひめたたら いすず ひめ
媛蹈鞬五十鈴媛を納れて

せいひ
正妃となす。

ぐわんねんかのととり
元年辛酉、

はるしやうぐわつかのえたつ ついたち
春正月庚辰の朔、

てんわう くらゐ かしはらのみや
天皇、位に橿原宮に即く。

とき とし
時に年五二

がう かむやまといはれひこほゝ でのすめらみこと
號して神日本磐余彦火火出見天皇

と曰ひ、

せいひ た くわつじう
正妃を立てゝ皇后となし、

ひもろぎ た はつしん まつ
神籬を建てゝ八神を祭り、

こくか ちんご
國家を鎮護す。

あめのとみのみこと せろまう いむべ ひき
天富命、諸の齋部を率ゐて、

てんじきやうけん さゝ
天璽鏡劔を捧げ、

せいでん ほうあん
正殿に奉安し、

あめのたねこのみこと
天種子命、

あまつかみのよごと
天神壽詞を奏し、

うまし ま てのみこと
可美眞手命、

うちものへ
内物部を率ゐて、

ほこたて と
矛楯を執り、

ぎゑい げん
儀衛を嚴にし、

みちのおみのみこと
道臣命。 來目部を率ゐて、

きうもん ごゑい
宮門を護衛し、

ぐんしんてうが
群臣朝賀す。

あめのたねこのみこと
天種子命・天富命に命じて、

とも さいし つかさど
共に祭祀を掌らしむ。

ねんみづのえいぬ
二年壬戌、

はる きのとみ
春二月二日乙巳、

こう さだ しやう おこな
功を定め賞を行ふ。

みちのおみのみこと
道臣命に宅地を賜いて、

つきさかのむら を
築阪邑に居らしめ、

おほく め うねびやま
大來目を畝傍山の

にし を
西に居らしめ、

しひねつひこやまとくこのみやつこ
椎根津彦を倭の國造となし、
おとうかし たけだ あがたぬし
弟猾を猛田の縣主となし、
おとしき あがたぬし
弟磯城を磯城の縣主となし、
たかみむすびのみこと せい
高皇産靈尊五世の
まことるぎね かつらき くこのみやつこ
孫劔根を葛城の國造となし、
あは やたがらす しやう
并せて頭八咫烏を賞す。
ねんきのえね はる きのえさる
四年甲子、春二月二十三日甲申、
しよりよすで たひら
諸虜已に平ぎ、
かいだいぶじ もつ
海内無事なるを以て、
みことり まつりのにわ とみのやま
詔して、時を鳥見山に作りて、
み おやのかみ まつ
皇祖天神を祭る。
ねんかのとう なつ
三十一年辛卯、夏四月乙酉の朔、
しやがじゆんかう
車駕巡行して、
わきのかみのはまのをか のぼ
腋上嗟間丘に登り、
ちけい くわいほう
地形を廻望し、
そ あきつ となめ
其の蜻蛉の臀帖するに
に
似たるを稱す。

これ はじめ あきつしま
是より始て秋津洲の號あり。

四十二年壬寅、
みづのえとら

はる きのえとら
春正月三日甲寅、

わうじかむぬ なかはみくのみにこと た
皇子神淳名川耳尊を立て、

くわうたいし
皇太子となす。

ひのえね
七十六年丙子、

はる きのえたつ
春三月十一日甲辰、

てんわう かしはらのみや ほう
天皇、橿原宮に崩す。

年一百二十七。

うねび やまのつことらのみやく ほうむ
畝傍山東北陵に葬る。

つるし じんむてんわう い
追諡して神武天皇と曰ふ。

諱「いみな（忌み名の意）」死後に云う生前の実名。

小名「をさなな（幼名の意）」幼い時の名前。

高天原「たかあまはらたかまがはら（天津神が居らしたと云う天上の國の意）」

「根の國」や「葦原の中津國」に対して云う。

娶る「めとる」妻として迎える。

天祖「あまつみおや（天皇の祖先の意）」天照大神から彦波瀲武草不合尊

（ひこなぎさたけうがやふきあへずのみこと）までの称。

下土「かど」大地、下界、片田舎、瘦せた土地の意味。

平定「へいてい（乱を平らげ定めるの意）」世の中を平穩に治める事。鎮定。

天孫「すめみま（天照大神の孫の意）」瓊瓊杵尊。

降りて「くだりて」天上界から下界へ移動する事。

葦原中國「あしはらのなかつくに（日本國の古称の意）」天上の高天原と、

地下の黄泉の國の中間にある地上世界の事。

主「きみ」ここでは天皇さまの事。諱「いみな（忌み

名の意）」死後に云う生前の実名。

小名「をさなな（幼名の意）」幼い時の名前

高天原「たかあまはらたかまがはら（天津神が居らしたと云う天上の國の意）」

「根の國」や「葦原の中津國」に対して云う。

娶る「めとる」妻として迎える。

天祖「あまつみおや（天皇の祖先の意）」天照大神から彦波瀲武草不合尊

（ひこなぎさたけうがやふきあへずのみこと）

までの称。

下土「かど」大地、下界、片田舎、瘦せた土地の意味。

平定「へいてい（乱を平らげ定めるの意）」世の中を平穩に治める事。鎮定。

天孫「すめみま（天照大神の孫の意）」瓊瓊杵尊。

降りて「くだりて」天上界から下界へ移動する事。

葦原中國「あしはらのなかつくに（日本國の古称の意）」天上の高天原と、

地下の黄泉の國の中間にある地上世界の事。

主「きみ」ここでは天皇さまの事。